

夏目漱石とクラシック音楽

(第6回)

漱石の親切

音楽学者・元東京藝術大学特任教授
瀧井 敬子

大賀典雄（1930-2011）は30年前の1989年に、ソニーの最高経営責任者になられた。母校を訪ねられたおり「音楽家は経済学を知らねばならない。東京藝術大学には経済学部が必要だ」と熱く語られた。当時の私には理解できなかったが、今ではなるほどと思う。

今日、斜陽といわれているクラシック音楽界であるが、次々に新しいコンサートホールは出来ている。しかし、いつも関係者が頭をかかえるのが集客である。それが無名の新人となると、親兄弟、親戚、友人にチケットの捌きを頼み込んだり、ときには招待券を乱発したりすることもある。7割の集客があれば、満員に見える、と業界ではいわれている。

さて、今から110年前の明治42年（1909）山田耕筰（1886-1965）は、まだ東京音楽学校の学生だったとき、無謀にも、コンサートで収益をあげてドイツ留学の資金を捻出しようとした。その折、夏目漱石はチケットを買っている。

漱石の娘たちがピアノを習っていた中島六郎は山田耕筰の知人であった。中島はロシア正教の聖歌隊の指揮者で、東京音楽学校選科を卒業していた。卒業後も音楽学校に出入りしていたので、飛び抜けて優秀だった山田耕筰のことを知っていた。そして、仲間たちと応援していたのである。

山田耕筰の留学資金集めのコンサートへ、漱石

は娘3人を連れてフロックコートで出かけている。明治42年11月9日付の中島宛ての手紙で、漱石は次のように書いている。

…もう少し人を呼びたかった様です。然らずんばみんなよりぬきの鑑賞家丈^{だけ}をあつめたかつた。私のようなものがあの中に入るのは何だか気の毒ですが、或は私同様の野次馬が這入つてゐるかも知れません。其野次馬を勘定に入れて、あの位の入りなんだから、気の毒です。

漱石が志のある青年への助力を惜しまない人間だったことは、つとに知られている。

人間はね、自分が困らない程度内で、なるべく人に親切がしてみたいものだ

『三四郎』のなかで与次郎に言わせているこの言葉は、漱石自身の心情である。

コンサートの収益金で留学することなど、そもそも無茶な話で、結局、山田耕筰は岩崎小弥太男爵の援助でベルリン王立音楽院に入学した。

ところで、大賀典雄の学歴は、東京藝大専攻科（声楽）終了後、ベルリン国立藝術大学を卒業している。山田耕筰と同じである。カラヤンと親交があり、クラシック音楽のCD開発に多大な貢献をした。この異色の経済人は、2000年落成のソニー・センター（ベルリン）の式典でベルリンフィルを指揮している。